VACUUM TUBE

失われた音を求めて，直熱管アンプ放浪記

300Bシングル，50シングル コンパチブルパワーアンプ

佐久間　駿　SAKUMA Susumu

序章

悠々たるかなフルヴェン
寥々たるかなパウエル
845を以ってこの大を計らんとす
原音再生の伝説ついに何らのオーソリティに値するものぞ
オーディオの真相は只一言に尽くす．曰く不可解
この恨みを抱いて煩悶，トランス結合に活路を見た若き日の我
すでに還暦まぢかに及んで，胸中何らの不安あるなし
改めて知る．オーディオは測定器の奴隷ではないと．
（『続直熱管アンプ放浪記』誠文堂新光社2002年）

今を去ること13年前．小冊のあとがきに記した一文だ．この想いは未だ寸分のぶれもない．トランス結合アンプによるモノーラルの再生．これが僕のオーディオライフのすべてといえる．

大病を重ねた末の憔悴しきった身に，情念にも似た執着という衣を纏い，この５年間トランス結合を見据えてきた．ブリーダーアンプ，ブレンドアンプ，そしてコンパチブルアンプなど．孫６人，ひ孫２人の，すでに古希を過ぎた老人が，この期に及んでキェルケゴールを読み，ミシェル・フーコーを読み，シモーヌ・ヴェイユに目を凝らす．この偉大な思想家たちの感性を自分なりのインスピレーションに変換させ，新たな発想を展開させるために．平たく言えば「100％の霊感，100％の職人芸」を成就させんがためだ．

「愛の結末」はなんとか決着をつけたが，トランス結合の結末はそう簡単にカタがつきそうもない．

わが師，池田圭が存命ならこういうに違いない．「佐久間さん．60，70はまだまだハナ垂れ小僧．80まで頑張りなさい」と．

チェンバロが鳴っている．

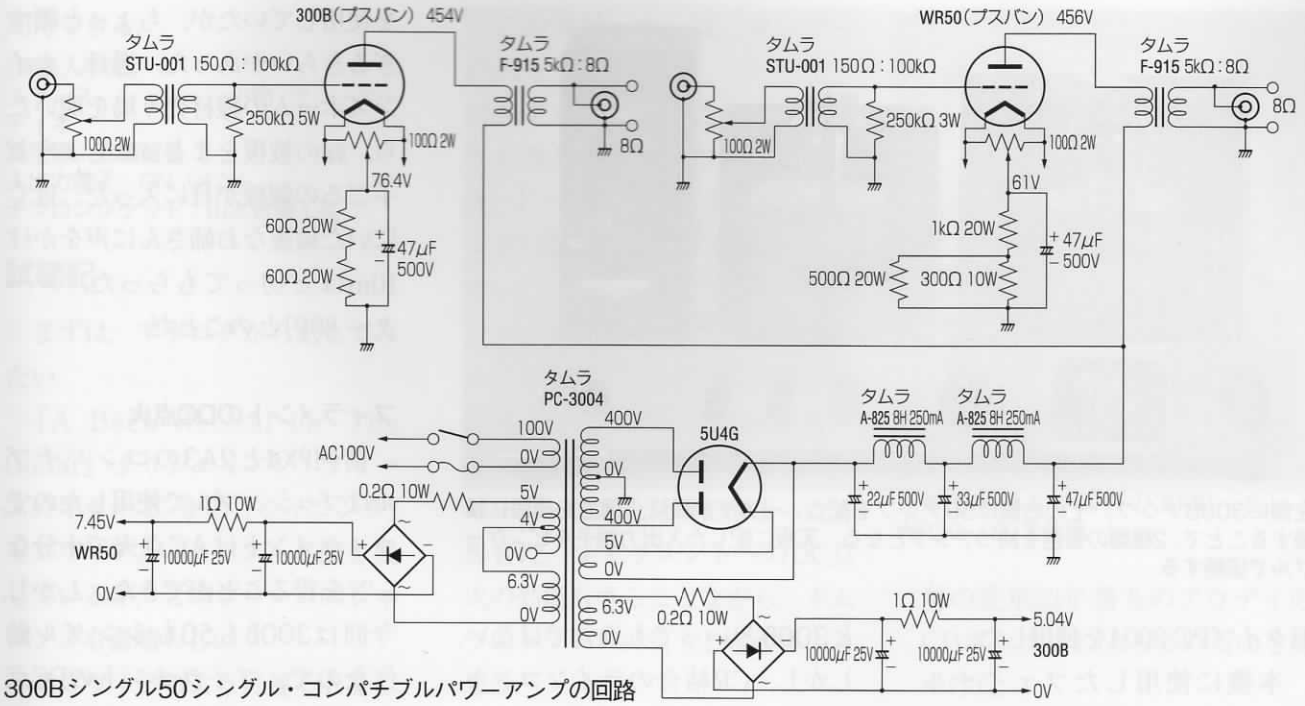
バッハ「半音階的幻想曲とフーガ」．

愛知の足立好弘氏から昨日届いた逸品だ．1973年の録音．グスタフ・レオンハルトの傑作だろう．同じものをレコードで持っているが，CDを聴いてみたくなり，彼に頼んだ．801Aドライブ801Aシングルパワーアンプ（MJ2009年２月）にドライブされたカワグチ・オーディオ製のスピーカーがいい音で鳴る．ユニットのエレボイ20cmは，エッジをローサーと同じ物に替えてある．

CDプレーヤーの出力は，カセットデッキの録音端子を利用したCD用EQ回路で軽くイコライジングし，チェンバロの原音より高音域を減衰させ，キンキンしない音に仕立てた．

この名曲は「半音階的幻想曲」と「フーガ」の２曲で対になっているが，僕は１曲目の「Chromatic Fantasy」が好みだ．この曲のみを，店の開店からもう３時間もリピートして延々と流して聴き惚れている．

なぜか今日はこの旋律から逃れられそうにない．なんと妖艶な曲なのだろう．そして，このスピード，めくるめく旋律に彩られた半音階的進行が突き進むさまは，まるで燃え盛る炎のようだ．「無伴奏ヴァイオリンソナタ第１番」とともにバッハの最高傑作といって



300Bシングル50シングル・コンパチブルパワーアンプの回路

シングルと50シングルの動作を何ら変えることなく，接続コードをつなぎ変えるだけで300Bドライブ50パワーアンプにも，また，50ドライブ300Bパワーアンプにもなるという趣向だ．

前回はPX4ppと2A3ppのコンパチブルだったが，本機では300Bシングルと50のシングルのコンパチブルに挑戦してみた．

本機の回路

STU-001にドライブされた単段300Bシングルパワーアンプ．同じくSTU-001にドライブされた単段の50シングルパワーアンプ．この2台のアンプを同一シャシー上に展開させた2チャンネルパワーアンプだ．

いい換えれば，出力管の異なるステレオパワーアンプともいえる．過日，ソニーのヘッドフォンをつないでステレオ再生を試みたが，素晴らしい音で鳴った．ヘッドフォンアンプとしても十分実用になる．

前回のPX4ppと2A3pp．そして今回の300Bシングルと50シングル両機とも，入力兼ドライブトランスSTU-001が存在してこそ陽の目を見たマシーンだ．150Ω：100kΩで使用したときには25倍の昇圧が可能だ．そして5Wというドライブ最大使用レベル．これほどのスペックを誇るトランスだからこそ，本機のような回路のコンパチブルが可能といえる．

30年前に自分がアイデアを出し，タムラの技術が総力を挙げて世に出した入力兼ドライブトランスSTU-001の存在がこれほどのものだったとは．今ごろになってSTU-001の威力に打ちのめされている．

STU-001は金型の老朽化にともない，タムラ製作所で一時生産を中止していた．今年2月に東京国際フォーラムにおいて，タムラ製作所創業90周年を祝して「タムラフェア」なる大イベントが開催された．そのおり地の果てから命がけでフェアに出向き，田村直樹代表取締役社長，浅田常務，南條取締役．このお三方に，「STU-001が存在しないと僕のアンプの発想が滞ってしまう」と窮地を訴えた．そのかいあってか，来年早々から生産するとのことだ．ほかにもドライブトランス2機種，アモルファストランス2機種，そしてインダクターA-394の生産も再開するとのことだ．

使用部品

出力トランスはタムラの新型トランスを使用した．F-915という5kΩ：0，4Ω，8Ω，16Ω出力．出力12W．1次最大直流電流70mA．1次インダクタンス22Hというスペックだ．

プッシュプル用の出力トランスF-925はたびたび用いて，分厚い中音域の再生をとても評価しているが，本機のシングル用トランスF-915も同じ傾向の音と聴いた．

インダクターはA-825を2個用いた．8H/250mAというスペックはたいへんなすぐれものだ．そして，このロープライス．いうことなしだ．

300Bの負荷は普通3.5kΩだが，僕の好みでは5kΩがベストだ．

おしむらくは，電源トランスだけはフィラメント巻線の都合で，

期待できる.

[部品入手先]
トランス，シャシー，小物：サン・オーディオ
真空管：五麟貿易
入出力端子：ON（オン）
テフロンソケット：山本音響工芸

試聴記

まずは，アナログから記してみたい.

『A Bach Recital for The Guitar』よりジュリアン・ブリームのギターで，かの「シャコンヌ」. セゴヴィア，イエペスも名演を残しているが，このブリームのシャコンヌも素晴らしい.

セゴヴィアのように速くもなく，また，イエペスのようにゆっくりでもなく，ほどよい速さで，おうようにこの大曲を弾ききっている. まさに英国紳士の弾くシャコンヌといえよう.

このレコード，またしても木更津高校の山口先生からのプレゼントだ.

ジャズを聴いてみよう.

『Live At The Jazz Workshop』からセロニアス・モンクのピアノ. チャーリー・ラウズのテナーで「ラウンド・ミッドナイト」. ライブのせいだろうか. 通常より大分速い演奏だ.

モンクのピアノもさることがなら，愛するチャーリー・ラウズのテナーが実によい. 続いては「ミステリオーソ」. たしかにミステリアスな旋律だ. この曲のモンクのピアノはすごい. 一球入魂という言葉があるが，まさに一曲入魂と聴いた.

試聴したシステムは，カートリッジはデノン102モノ. フォノEQは450THフォノEQアンプ（MJ2009年 6 月号）. そしてスピーカーは豊橋の多田陽一氏の入魂一作「スモール・ベクター」.

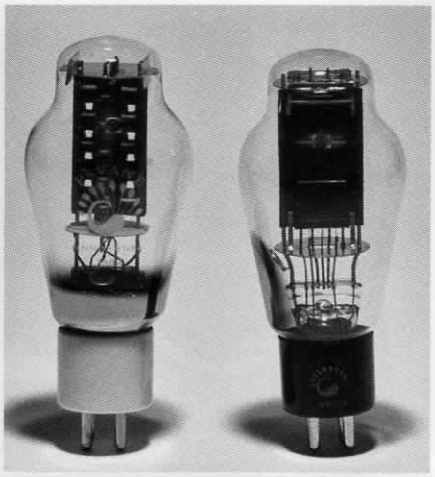
このスピーカーは，ローサーPM4を上面に据え，ローサーPM6を前面に配したウイング付きの逸品だ. 今までこのスピーカーにベストマッチするパワーアンプがなく，長い間不遇の身をかこっていたが，本機300Bと50のコンパチブルパワーアンプと肌が合いそうだ. S/Nは，完璧と褒め称えたい. 300Bと50の 2 台のアンプをフルボリュームにしてスピーカーに耳を付けてもまったく無音だ. フィラメントへのDC点火の効能もさることながら，タムラのトランスに負うことが多いと思う.

続いてはCDの再生を記してみたい. 100THラインEQアンプとバッテリーを組ませての再生だ.

イーグルスの不朽の名作「ホテル・カリフォルニア」. 聞くところによれば，マイケル・ジャクソンに次いで世界中 2 番目に売れたレコードだとか. 50前後の方でこの曲を知らない人は稀だろう. イントロの途中で出てくるドラムスの音に背筋がぞくっとする. ヴォーカルもギターも音に陰りがあって，実によく鳴る.

続いてはドリフターズ. ドリフターズと言っても，志村やカトちゃんのドリフターズではなく，本場アメリカのドリフターズだ. 「ラスト・ダンスは私に」. 僕はこの曲が好きだ. 「貴方の好きな…」で始まるコーちゃんの日本語バージョンも中々だが，やはりオリジナルは素晴らしい. ちょっと鼻にかけた野太い声でドリフターズに歌われると，胸がキュンとなる.

なお，このCDはいわくつきの物だ. ある日，いざ聴こうと思って探したが，どうしても見つからず，20年間このCDを探しまくった. あきらめかけていた矢先，女房の愛車23年落ちのアウディのCDボックスに入っていたのを見つけた.



比較的廉価な中国製の300B（左）とWR50（右）を使用

日本の歌を記したい.

石原裕次郎と浅丘ルリ子のデュエットで「夕陽の丘」. それと牧村旬子とのデュエットで「赤いグラス」. 裕次郎さんは数多くのレコーディングをしているが，僕はこんな裕次郎の曲が好きだ. 「ブランデーグラス」というしゃれた曲はあまり好きではない. なぜかというと歌に実がない. 赤坂あたりの高級クラブかなんかをイメージさせるが，女が手練手管で男をたらしこんでいるさまを想像させる.

裕次郎の映画自体も坊ちゃんの学芸会を連想させるものが多い. 彼自身，育ちよい慶応ボーイだから，これが地だろう. だが「夕陽の丘」と「赤いグラス」. この 2 曲はいつ聴いても心がさわぐ.

続いては小林旭を書いてみたい. 前回MJ7月号の記事中にも記したが，『仁義なき戦い』の旭は絶品だった. 彼は役者としても，また，歌手としても独特のにおいがある. 土着的な哀愁とでも表現しようか. 彼は裕次郎と同じく，歌手顔負けのレコーディング数を誇っているが，その中でも「さすらい」と「昔の名前で出ています」.

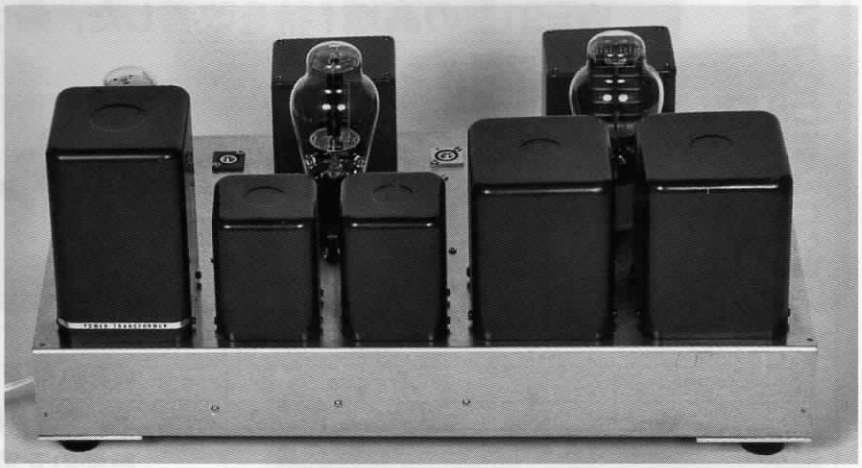
クターと組んで，たいがいのソースをうまく鳴らす．友人の神作氏が驚いていたが，意外と強靭な音だ．出力が小さなわりにはパワー不足を感じさせない．思うに，入力トランス兼ドライバートランスとして使用したSTU-001の絶大なる効果といえる．このトランスあってこそ，アンプの動作を変えることなく，いじることもなく，入出力をコード１本でつなぎかえるだけで，これだけの仕事をしてしまう．トランスのマジックだ．300Bドライブ50シングルのときは，50特有の高域がたっぷりと出る．現代版オリジナル50の音だ．

50ドライブ300Bシングルにすると，音がガラッと変わる．中音にエネルギーを集約させた，とても渋い音だ．これも現代版オリジナル300Bの音だ．どちらを鳴らすにもスピーカーコードを隣の端子に移し，コードをつなぎかえるだけなので，ものの10秒とかからない．

昨日から弊社「アメイジング・アンプリファイアー」の首席工事部長の斉藤敏夫氏が次の作品，211シングル，845シングル・コンパチブルパワーアンプのシャシーの間取りに入った．このアンプ，年内にカタをつけたい．キェルケゴールが『死に至る病』の中で書いている．「絶望こそ，死に至る病だ」と．次回のアンプ，うまくいかなくても絶望などけしてしてはならない．なぜならこのアンプ，1kVという，下手すれば「死に至る電圧」だからだ．

所感残暑

昨日，大荷物を持った恰幅のいいお内儀が来た．ここ20年ほど，お盆のころ年に一度だけ必ずおいでになる．毎年，これ以上は持てないというくらいの大荷物だ．亭主はかなりのオーディオマニアと見た．だが，オーディオに関しては一切能書きをたれない．こういう人は怖い．とてつもないシステムで聴いていたりする．彼もマッキンが限定で出したKT88パラppパワーでJBLパラゴンなんかを鳴らしてるんじゃないだろうか．



左に電源トランスPC-3004，その右にチョークコイルA-825と出力トランスF-915を２個ずつ配置．いずれもタムラ製作所の製品

今日はベルギーから客人があった．中丸まどかさんという芸大のヴァイオリン科を出た才媛だ．綺麗なお姉さんで，ベルギーで音楽活動をしているとのこと．僕と旧知のピアノの調律師が案内してきた．聞くところによると，彼女は最晩年のレオンハルトの譜面めくりもしたことがあったという．

50ドライブ50フォノEQと50ドライブ50シングルパワーにローサー・オーディオベクターをつなぎ，シゲティの弾くバッハ無伴奏ヴァイオリンソナタ１番を聴いてもらったが，涙をボロボロ流して感動してくれた．自分がヴァイオリンを弾きながら生音の高音が癇に障ることがよくあるが，それがまったく耳につかず「この音は原音を超えています」とまでいってくれた．また，持参した高価な楽器で16世紀のフランスの佳曲を弾いてくれたが，我を忘れたひとときだった．こんな人にときどき出会うから，店がやめられない．

終章

終戦記念日が来ると，夕刻，ベートーヴェンのシンフォニー第３番エロイカの２楽章を鳴らすのが常だ．先の大戦で命を落とした世界中の何千万人という人々の御霊を慰めんがために．また今年は，日航機の御巣鷹山墜落事故から30年目に当たる．御巣鷹山の尾根にのたうって，無念の死を遂げた500余名の方々の冥福を念じ，チャイコフスキーのシンフォニー第６番「悲愴」の終楽章を鳴らした．

戦争も飛行機事故も原発事故も，時間がたつにつれて風化していくことは避けられない．だが，その風化に少しでも歯止めをかけ，後世に伝えようと頑張っている人たちがいる．その反面，1日も早く風化することを望んでいる輩がいることも事実だ．

夜半，バド・パウエルの「パリジャン・ソロフェア」を聴きながら，こんなことをつぶやいた．

敗軍の将，兵を語らず．
敗軍の兵，将を語らず．
暗愚の将，己を語る．
夏がゆく．